

事後評価報告書(日本-インド研究交流)

1. 研究課題名:「音声言語における韻律のモデル化とそれによる音声合成」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:東京大学 大学院情報理工学系研究科 教授 広瀬 啓吉

2-2. 相手側研究代表者:高度コンピューティング開発センター(C-DAC)

主幹研究員 Shyamal Kumar Das Mandal

3. 総合評価:(A)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

日本の先行した成果との組み合わせで、ベンガル語については、実用に耐えうる音声合成が実現できたことは評価できる。今回、ベンガル語のみを対象としたが、インドには他にも多くの言語があり、それらの言語へも容易に展開できる方式にすることが期待される。

(2)交流成果の評価について

相互機関へ多くの研究者が訪問し合い、共同研究に係るワークショップ、セミナーを何度か実施していることは評価できる。一方、日本とインドの研究者の共著論文が無いので、原著論文における連名の発表が望まれる。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

特許出願がないのが残念である。音声合成は多様な言語に適用可能性がある国際性の高い研究分野である為、部分的なアイデアのレベルにおいても、海外出願も含め、特許出願しておくことは今後の国際競争において重要と考えられる。また、研究内容の特質から、日本-インド間の共同研究を継続しながら、複数国間での更なる共同研究につなげる検討が必要である。